

私は、2007年4月に夫の転勤で、夫婦2人で福島県西白河郡西郷村に引っ越しました。愛知県豊田市で生まれ育った私は、四方を工場に囲まれた地域で暮らしていました。西郷村での私の楽しみは、ふわふわの芝生、大きな木々の間を散歩し、空気の清々しさに深呼吸すること、日ごとにかわる夕空を眺めること、小さな家庭菜園とハーブを育てることでした。産地直送のお店には、新鮮で安い野菜や果物が並びます。果物でジャムを作ったり、椎茸はとて肉厚でおいしく、椎茸が好きになりました。また採れたての松茸やタケノコをいただくなど、自然の恵みに感謝する生活を送っていました。冬の厳しい寒さを経験し、春の芽吹き、桜の開花がとてうれしく、いとおしいものを感じました。転勤族の夫と定年後は、自然豊かな福島県で暮らそうかと話していました。しかし今では、それらを放射能測定しなくてははいけません。除染のため、芝生ははがされ、木々は切り倒され、荒れ地になりました。悲しくて涙がでました。

2011年3月11日、私は、車で買い物に出かけ、信号待ちをしている時に、道路が左右に大きく揺れ、しばらく、動くことができませんでした。何とか家に戻ると、あらゆるものが床に散乱し、電気、ガス、水道が止まっていました。徐々に明らかになる地震と津波の被害のすさまじさに圧倒され、自分には何ができるだろうかと考えていました。12日にやっと電話がつながり、実家に無事を伝えました。その後、県外の知人たちから、「原発が危ないらしい。いますぐ避難した方がいい」という電話が入りました。みんな必死に電話をかけ続けてくれたそうです。でも、当事者の私たちには、現状はわかりませんでした。私は福島の沿岸部に原発があることは知っていましたが、深く考えたことはなく、原発についての知識はありませんでした。

震災前から体調不良だった夫と、13日の夕方に、車に少しの食料と水と毛布、3日間の着替えと貴重品だけを持って家を出ました。夫が静かにゆっくり休めるところをと思いましたが、結果的には1ヶ月間で4カ所を転々とする避難生活になってしまいました。その

間に、原発、放射能について、インターネットで情報を集め、本屋で本を買い、一生懸命勉強しました。自分が被曝者になってはじめて、自らの無知、無関心を猛烈に後悔し、反省しました。同時に、後出しに発表される原発事故の被害の大きさに呆然としました。スピーディーの情報は、生かされず、メルトダウンしていたことを発表したのは2ヶ月後、公園や学校のモニタリングポストの線量は地域の実態を反映していません。被害を少なく見せる、情報を隠蔽する、嘘をつく政府や学者、マスコミのでたらめさに猛烈に腹が立ち、恐ろしくなりました。

事故から、1ヶ月後、福島に戻りました。その頃の西郷村の空間線量は、 $0.6 \mu\text{Sv}/\text{時}$ 前後でした。少しでも被曝を減らすために、勉強したことをもとに、福島で生活する上で気をつける「我が家の10箇条」を夫が作ってくれました。例えば、外出時はマスクをつける、窓を開けっ放しにしないなど。しかし、梅雨に入る少し前、室内の米、野菜、インテリア小物などカビだらけになってしまい、暑くなってきたこともあり、窓を閉め切って生活することをやめました。放射能の汚染地帯で、被曝の低減を図りながら、日常生活を送ることは、精神的にも物理的にも経済的にも、非常に難しく、毎日、何をやるにしても、選択を迫られ、結果として、妥協、あきらめの連続で、とても苦しいです。もし、子どもがいたら、どんなに不安で心配かと思います。こんな取り返しのつかない事故を起こしたにもかかわらず、本当の情報が隠され、「ただちに健康に影響がない」と子どもたちを守ろうとしない人たちが、私は、放射能よりも心底恐ろしくなりました。無用な外出を控え、涙とため息の毎日でした。1ヶ月を過ぎた頃、私以上に夫の精神状態が悪くなっていることに気づきました。閉じこもって、泣いていても何も変わらない、このままではいけないと思い、インターネットで調べて、様々な学習会、講演会、デモなどに参加しました。

日本の原発事故前の法律では、一般公衆の被曝限度量は年間 $1 \text{mSv}/\text{年}$ でした。しかし、原発事故後、あらゆる基準値、規制値が引き上げられ、新たな放射能安全神話が猛烈な勢いで、隅々まで広がっていきました。2011年5月、学校の校庭の線量が年間 $20 \text{mSv}/\text{年}$ なんて、高すぎる！撤回して！と福島から、バスで文科省に行きました。小雨の降る中、建物の中にも入れてもらえず、中庭のコンクリートの地面に座り、撤回を求めました。大臣は出てきませんでした。当時、小佐古内閣官房参与が、子どもに $20 \text{mSv}/\text{年}$ は学問上もヒューマニズムからも自分は受け入れられないと涙の抗議辞任がありました。しかし、秋には、

復興イベントと称して、屋外で様々な行事が行われました。抗議や疑問の声は、「国が、100mm Svまで大丈夫だといっている。心配する方がおかしい。神経質過ぎる」とバッシングされ、ものが言えない雰囲気が作られていきました。

浪江町から本宮市に避難した橘柳子さんは、10カ所の避難先を転々とされました。しかし、この数字は決して珍しいものではありません。橘さんは「先の戦争責任があいまいなまま、今日に至った日本はまた再び、原発事故の責任をあいまいなままにするつもりなのでしょうか。戦争と原発事故、この2つにより、私は2度棄民にされたと思っています」とおっしゃいました。また、子どもを連れて、福島市から母子避難した宇野朗子さんは、避難しながら、福島に残っている友人、知人たちに、放射能の危険性や避難について必死で発信し続けたそうです。そのほか、避難にともなって、離婚した人も少なくありません。そして、多くの人は厳しい避難生活を強いられています。福島で生活をする人も不安を抱えながら、押し黙って暮らしている人もいます。絶望と不安の中で自ら命を絶つ方もいます。

2012年、福島県農業総合センターが、大根の乾燥実験結果を発表しました。屋外乾燥では、最高3421ベクレル/kgを検出し、空気中を漂う、ちり、ほこりの付着が原因と断定。地面に干さないようにと指導がされました。地面に近くなるにつれ汚染度は高く、特に子どもたちの呼吸、内部被曝が心配です。しかし、人への影響については何も言及されません。福島県健康管理調査の甲状腺検査で、2014年6月、子どもの甲状腺がん（疑いを含む）が、103人と発表され、手術している子どもに、リンパ節転移をはじめとして深刻なケースが多数あることが明らかになりました。12月には、甲状腺検査の2巡目で検査結果が確定した約6万人の子どもたちから、甲状腺がんの疑いの子どもが4人見出されました。いままで考えられていたよりも急速な甲状腺がんの進行が懸念され、切迫した状況です。健康被害は、大人にも、がんだけではなく、様々な病気の可能性が危惧されています。にもかかわらず、国も県も最初から原発とは因果関係はないと決めてかかり、福島県外での健康調査を認めず、縮小しようとしてさえ画策しています。国も東電も私たちから、多くのものを奪い、破壊しておきながら、だれも事故の責任をとらず、正当な賠償を行わず、住民が反対しても、汚染地に帰還させ、棄民と難民を生み出しています。原発事故が起これば、その傷は至る所に入り込み、重くのしかかり、そこから逃れることはできません。発電の方法は原発だけで

はないにもかかわらず、なぜ、一民間企業の営利活動で、ここまでの犠牲を強いられなくてはいけないのですか。原子力規制委員会と政府と電力事業者の間で、責任の所在を曖昧にし、責任を押し付け合いながら、原発を再稼働し、海外に輸出するなど、到底許せません。このままでは、原発事故は繰り返されるのではと思います。現在も大気中へ 1000 万 Bq/時放出され、高濃度の汚染水放出は続いています。経済活動と天秤にかけられる命なんてありません。私は昨年の大飯原発差し止め訴訟の判決文を泣きながら何度も読み返しました。原発事故前の生活、環境に戻すことができないのだから、せめて、すべての原発を即時廃炉にすることが、償いの第一歩であり、人間が地球で生活させていただく条件だと思います。